



100歳まで現役で金型屋を続けるぞ!!

～ 93歳の2代目が経営するプレス金型屋～

合資会社 北橋製作所 代表社員 北橋 幸雄氏

93歳の社長と87歳の総務部長で張り切る

2010年の都道府県別平均寿命が、2月に厚生労働省から公表された。東京都の男性は79.82歳、女性が86.39歳である。

今回ご登場願った北橋社長は当年93歳、夫人である取締役総務部長は87歳。

同社の社屋の3階にある社長室に行くにはエレベーターがないので階段を上って行くことになるが、杖を持っているけれども毎日誰の助けもなく、“運動だ”と登り降りをするほどの元気ぶり。

体だけでなくお口の方も達者でヨドミなく出てくる。衆議院に帰り咲いた“暴走老人”の石原慎太郎議員などお傍にも寄せ付けないという印象。

銀座育ちで総務部長の美人の奥さんも社長に負けないくらいの、お年を感じさせない立ち振る舞いでお客様に接して内助の功を發揮されている。

金属プレス金型の草分け

合資会社北橋製作所は、大正8年(1919年)5月5日に東京都墨田区押上で創立。今年94年を迎える。仕事はプレス金型、特に深絞りを得意してきた。全国的に見ても日本の金型産業をしょって来たその歴史は非常に貴重な存在であり、この年でも聖路加国際病院の日野原先生に負けるものかと、まだ6年も先の話だが100歳は超えても経営は自分で続けると強調する。

その秘訣はと聞くと“お酒”である。最近は無茶飲みをしないが元気の元だと述べる。

北橋さんの父幸造氏は、石川県出身で大阪のパン店に弟子入りしたが船に乗りたくて船乗り転身。その後東京にいる親戚の誘いで型屋の手伝いをし、東京墨田区で独立した。

設立当時、幸造氏は自分で「金型のなんでも屋」

と称しゴム・ガラス・プラスチック・鍛造等の仕事をこなしてきた。墨田区周辺は、明治後期から外国から輸入されたブリキやゴム製の玩具をまねて、それらの玩具工場生産の中心地になり、材料もブリキ、セルロイド、アンチモニーを使った玩具が作られていた。

幸造氏は、ハーモニカのリード部のプレス部品や外国製の玩具の金属部品等の加工金型を手掛けていたという。

大正時代から、自転車・自動車等も開発され、プレス加工が行われるとプレス金型が大量に求められる時代になった。

北橋製作所は本格的に自動車部品であるラジエーター類の金型を製作し、いすゞ、日産等の自動車会社に納入してきた。

戦前から自動車産業用としてラジエーターの他オイルクーラー、マフラー、オイルパンシート用パーツ等の金型、特に深絞り金型をメインにして企業成長を遂げてきた。

「金型屋は2足のわらじを履くな！」

北橋製作所は、初代幸造社長が創業以来の企業哲学として自らも、また2代目の幸雄社長に伝えてきたのは、「金型屋は2足のわらじを履くな！」ということと「購買は現金」であるという二つにこだわった経営者であった。

まず、そのひとつが「合資企業」へのこだわりである。この形態の企業は、現在では、①イメージが悪い、②1人では設立できない、③無限責任というデメリットがあるため、ほとんど存在しない。特に最後の無限責任は倒産したら債務の全額負担を求められる。

しかし、ご本人にこのことをお聞きすると“会う人ごとに必ず論される”というが、北橋社長は経営

者の責任は当然だと、全然ぶれない。また、機械の購入は「現金払い」を通してている。

昔、父親の幸造氏が他人の保証人になり、それで債務をかぶった苦い経験から、現金購買にこだわってきたという。

お国に「体」を預けるが、敗戦で復員

父親の仕事が手伝えない事情が発生した。それは昭和15年12月に「赤紙」が届き、北支派遣軍高射砲部隊に入隊、その後、アジア各地を転戦後昭和20年仏領サイゴンで終戦を迎え、航空母艦に乗って本土に復員した。戦争で兵隊にとられた北橋社長は、自分はもう生きて帰ってくるとは思わなかったという。

戦争中、自分の留守に父親の仕事を手伝ってくれたのは姉の夫で、義父の金型屋を継ぐつもりで養子に入ったのに、東京での空襲に遭い爆死してしまった。

しかし、日本の敗戦で続々外地から兵隊が復員。その中に北橋さんも含まれていた。東京は焼け野原だと聞いていたが、自分の目で見てみたいと亀戸駅に着き、駅長さんに場所を教えてもらったら、「父親やお袋さんたち、兄弟子たちがバラバラではあるが、連絡がつくことが分かり、みんなが大喜びで迎えてくれた」。

本格的な工場の再開は、昭和21年までまたなければならなかったが、その間、闇屋に近い生活でしのぎながら亀戸工場の再建に集中したという。父親も息子の北橋さんが無事戦地からの復員に接して元気がでてきたという。近所に預けていた機械類や材料等の整備を行いだした。

工場再開を聞いてかつての兄弟子や小僧さん達が再結集して元のにぎやかな工場に戻ってきたが、父親の息子が帰ってきた喜び感とは異なり、戦地帰りの北橋さんは、すぐには働く意欲が出ず、かつての戦友と遊びまわり、しばらくはぐれていた。昭和23年に合資会社北橋製作所に組織変更後、昭和39年に代表社員に就任し、2代目をついだ。

初代社長から引き継ぐ人望

北橋製作所は初代の幸造氏が、プレス金型だけでなく、戦前から同業者の面倒を見てきた関係で、



“親方”として慕われてきており金型業界では顔の広い方として存在感があった。

2代目の幸雄社長は、親父さんの教えを守りながら「金型屋」は絶対守りぬくという気概を持って頑張ってきたが、金型以外のプレス加工までは手をつけないという。金型屋は金型作りという「一行に徹して」きた。その姿勢で初代と同様、同業の金型屋さんからの相談ごとには辛口ではあるが真心で接して対応してきた。

沢山の表彰状・感謝状

これには日本金型工業会の副会長、同東部支部長、戦前から設立されている親睦団体の「東京型親会」の会長、金型健保・金型基金役員等の世話役も頼まれたら引き受けてきた。

社長室には所狭しと、いろいろな感謝状や表彰状が飾られており、総務部長の奥さんに聞くと「ここに飾ってあるのは極一部のの」という説明を受ける。

例えば平成9年授章の黄綬褒章。優良納税者として税務署からの感謝状。東京消防庁からの感謝状。健康保険組合、厚生年金基金の感謝状。その他東京足立区、足立労基署、東京ラヂエーター、日本赤十字社、東京商工会議所、東京都知事、経済産業大臣等々の表彰状。これは世間に対するボランティア活動度への貢献とアクティブな活動もある。

わが国の金型産業人として活動してきた北橋社長が、100歳まで頑張るといふ意気には敬服させられるが、お酒控え目、仕事控え目、奥さん大切に、目標に到達していただきたい。(I)